



空腹なし、名声あり：L'Oréalの昼食

午前中はまるごと仕事で過ぎた。いちばん驚いたのはジョルジョの沈黙だった—こういう私をじっと観察しながら、こちらのことを本当は何も知らなかったのだと気づいていたのだ。

バイヤーのリータは、私たちとほとんど同時に、バイクでレストランに着いた。ヘルメットを脱ぎ、長い髪をはらりと下ろす。美容院に行ってきたばかりなの、気に入るかしら、とでも言うように。

ジョルジョがにやにやしはじめて言った。ちくしょう、やっぱりな、お前のためにめかしこんでくると思ってたよ、この運のいい野郎め。

何を言ってるんだ、気でも狂ったか、と私は場を冷まそうとして言った。店に入ると、彼女は隅のテーブルを選んだ—人目につかない、ただし丸ではなく、わざと長方形のテーブルを—そして私に隣へ座るよう求めた。

堅苦しい話し方はやめましょう、と彼女は言った。年も同じくらいだと思うし—こちらは構わない、ただしカタニーア市役所に登録されている本当の年齢は訊かないで okay、それは向こうのテーブルに座っている連中の仕事だ。

彼女は吹き出し、それから、舞台俳優なのかと訊いた。ある意味ではそうだ、と私は言った—ただし私の舞台は路上だ。

お仕事は何を？ 魔法使いに決まってるだろう—何て質問だ！ はははははは。

じゃあ、本当の仕事を教えよう。男たちに、自分を魅力的で面白い人間にする方法を教えているんだ。そうすれば知的な女性を—君のような女性を—見つけて、うまくいけば、恋に落とすこともできる。

幸先がいいわね—それで、その仕事は何て呼ぶの？

法衣は着ていないが、声は持っている司祭だよ。

ジョルジョが会話を引き取り、本社と取り決めてきたことを話した。私はふざけるのをやめた。

その日、商売や売上の話は誰もしなかった。だが、ひとつ分かったことがある。男の値打ちは、その男をつくった母親の値打ちを超えない。

フェルディナンド